
菜の花満開の道、共に～銀時＋チビ銀日和～

草紙屋本舗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

菜の花満開の道、共に〜銀時+チビ銀日和〜

【Nコード】

N8487M

【作者名】

草紙屋本舗

【あらすじ】

菜の花咲く〜のストーリーをもとに、大好きなドラマ『ゴースト〜天国からのささやき〜』とか、いろんなもんをトッピングしてきたお話です。チビ銀がフル登場なので、甘味は少ないもののミルク味はちょい多めかも…？なんか銀ちゃん、いいお父さんっぷりをいかになく発揮しはって、危うくまたもや惚れ直しちゃいそうになりました…（笑）。チビ銀は、もちろん前回のストーリーの時のもの。できればこのチビがもう少し、おおきゅうなってるからのお話も書いてみたいけど、さらにおっさん化が進んだ銀ちゃんを見たい

ような見たくないような…書いてもないのに今から、悩んどります。

さておき、まずは銀ちゃんの男前な父っぷりを、ずずいっと満喫いただければ、嬉しいですよ

電車の窓を小さい手で持ち上げようとするが、なかなか動かない。見かねた銀時が手を出そうとすると、女の子が口をとんがらせて文句を言う。

「ちちうえは、見てて！」

女の子の声に合わせるかのように、隣にいる男の子もこくりとなずく。

「……はいはい、わかりましたア。じゃあ、自分たちで開けてみな？」

ふたりのこどもは、よいしょ、よいしょと言いながら窓を押し上げようとする。何度目かの掛け声の後に、ぐぐぐツという鈍い音をたてながら窓が開いた。その途端、心地いい風が車内いっぱい吹き込んでくる。こどもたちの髪をくすぐるように風が吹き抜け、その気持ちよさにふたりはきゃっ、きゃっとはしゃいだ声をあげた。

「ちちうえー、見て見てー、じぶんで出来たのよー」

「はいはいはい、すごいすごいねエ。あーでも、電車の中では静かにしましょうねエ。母上もそう言っていたでしょうがア？」

「……でも、ちちうえ、でんしゃの中にはあたしたちしかいませんよ？」

「はいはい、そういう屁理屈こねないのオ。ってか、まアそうなんだけどオね。」

いいですかア？これは約束です。勝手に電車の中を歩いたりしないでねエ？危ないからア。

あと、もう一個、大きな声も出さない。うるさいからねエ？わかりましたかア？」

はい！と言つてふわっふわくるつくのくせつ毛の女の子が、目をきらきらさせて返事をする。隣にいる同じ年頃の男の子は、電車の模型を大切そうに抱えながら無言で頷いた。ふたりとも靴を脱ぎ、座席に半立ちになりながら窓の外を興味深げに見つめている。そん

なふたりのそばで、銀時は窓枠に手をかけふたりのこどもの様子を見ながら、見るともなしに車窓の風景を眺めていた。

「…ちちうえ？」

「ん？」

「おはなが、たくさん咲いているのよ」

「ああ、そうだねエ。いっぱい菜の花が咲いてンねエ」

「あのおはな、なのはなっていうの？」

「おう、そうだよ？あの黄色い花は菜の花っツって、春になるとわんさか咲きまくるお花だよ？」

「きれいなえ…ひな、はじめて見たのよ」

そう言って菜の花畑に見入る女の子。その頭を愛しげにくしゃくしゃとなでる銀時。ふわふわくるくるのくせつ毛はツイン・テールに分けられ、かわいい髪飾りがついたゴムでまとめられている。その小さな頭をなでながら、しみじみと銀時は呟く。

「なんだかねエ…。あんなに気合をいれたのに、ひなには届かなかったのねエ…サラサラヘアパワー」

「なんか言っただ？ちちうえ？」

銀時を見上げるその顔は、銀時そっくりだ。切れ長のきれいな一重の目、すつと通った鼻筋。違うといえば、松平片栗虎の言葉を借りるならば“黒曜石のような大きな瞳！よかった、死んだ魚のような瞳じゃなくてほんとよかったよウ！”なところか。黒目がちの大きな瞳で、じーっと下から見上げられると、件の片栗虎は「おうおうおうおう、ひなちゃん、どうしたどうしたア？おじちゃんになにかお願いごとかなア？」とめろめろになる。その必殺視線が銀時を見つめている。

「ん？どしたア？おしっこか？」

「ん〜ん、ちがうのよ。あのねえ、どうしてちちうえの髪の毛は、くるくるなの？」

「どうしてって。いやおまえも、たいがいくるくるですけどオ？」

「あと、どうしてちちうえの髪の毛は銀色なの？」

「どうしてだろ？あんま、考えたことないことなんですけどオ…今、答えなきゃだめ？」

「だって、とうしろちゃまとか、そうごちゃんとか、いさおちゃん、くろとかちやいろなのに、ちちうえだけ変よ？」

「変つて。しかも黙って聞いてりやア、全部真選組の連中のことばつかじゃないのオ。」

おまえねエ、いったい誰になにを吹き込まれたの？

怒んないから、父上にちゃんとやってみなさい、ちゃんとオ。ね？」

「えとね、かたくりこのおじちゃまが言つてた」

「…くそじじイかよ。…ったくよオ」

「じじいじゃなくて、おじちゃまなのよ」

銀時は舌打ちをしながら、女の子を軽々と抱き上げ自分の膝の上にのせる。そうして、自分そっくりだと言われる女の子の顔をのぞきこみながら言った。

「陽菜は父上のくるくるの髪の毛とか、銀色の髪の色、嫌いイ？」

「ううん！ちちうえ、だーい好き！変でもだい好き！ときまつも、そうだよね？」

そつと銀時の袖をつかみながら、男の子がにこりと笑つてうなずく。そのはにかんだ笑顔を見ながら、女の子を左脇に抱えなおすと、銀時は男の子を右腕の中に抱え、ふたりを膝の上にのせた。

「父上もオ、陽菜と時松のことがア、大大のだーい好きだよオ」
ふたりのおでこに自分のおでこをくつつけるようにしてぐりぐり押すと、こどもたちは嬉しくてたまらない感じできやーつと歓声をあげる。ふたりのこどもは今、三歳になった。妊娠がわかり、いよいよ臨月を迎える頃、双子だとわかり銀時をはじめとして周囲はおおいに喜び、そして大慌てで準備をしたものだ。

最初、すべて手縫いでおしめを作る！と豪語していたお登勢は「双子オ？ならしょうがない…たま！手伝っておくれな！」とからくり店員のたまの手を借り、一生分ほどのふたり分のおむつを作つて

くれた。

ふたごの知らせを聞いた“かまっ娘クラブ”のメンバーからは、ふたり分の赤ん坊のおもちゃセットが贈られた。柳生家からもふたり分の武道稽古セットやら、橋田屋からはふたご用のバギーを贈ってもらい重宝したものだ。

そんな風に、大勢から望まれて楽しみにされて、生まれてきたのが陽菜と時松だ。女の子と、男の子の二卵性双生児だった。陽菜の名前は松陽先生の名前から一文字もらった。時松も同様、松陽先生の名前から一文字もらい、自分の名前と合わせた名前にした。

時松は母親から、くりくりとした大きな目とサラサラのストレートヘアを受け継いだようだ。けれど口が大層重い。一日中、一言も発さないこともある。周りの大人たちはなんやかんやと心配しているが、銀時はあまり気にしていない。なぜなら自分もそうだったからだ。物心ついてからしばらく、必要なこと以外は口をきくことがなかった。なぜだかはわからない。ただ、松陽先生に引き取られ、先生にいろいろ教えてもらううちにだんだん言葉が口から出てくるようになった。だから時松もいずれ時期がくれば、話すようになると思っている。定春がとても時松になついているのも、安心していい。

…動物と仲良くできるのは、人にやさしくできる魂が育っている証拠だよオ？

それに、こつちの話すことはちゃんと通じているんだし。まあ、なんとかなるでしょオ？

一方の陽菜は、銀時の特徴をすべて受け継いだかのようだ。一重の切れ長の目にくるくるふわふわのくせつ毛。時松とは対照的に、一歳をすぎた頃からどんどん口が達者になってきた。気が強く、たまに時松が近所の悪ガキにからかわれたりしていると、小さな体で相手になっているらしい。同じ頃に生まれた泰三のところの息子、

泰樹とも仲がよく、三人で水泳教室に通っている。こないだも水泳教室から帰ってくるなり銀時にこんなことを言ってきた。

「あのねえ、たいきちゃんのちちうえは、いつも泳ぐのおしごとの？」

「あ？なんで？」

「だってねえ、きょうのおむかえのときもゴーグルつけてるから」
泰三が肌身離さずかけているグラサンのことを水泳時につけるゴーグルと思い、そんな質問をしてきたのだ。泰三にその話をしてやると、大笑いしていた。最近の陽菜は、ありとあらゆることについて聞きたくてたまらないらしい。何か目新しいものを見つけたたり、気づいたりすると「あのねえ…」と質問が始まる。

：おとなになったよなア。生まれたばかりの頃は、両手のてのひらの上でびーびー泣いてるような大きさだったのにイ…

それが今では「ちちうえだけ変よ？」なんて言うまでに大きくなった。いっぱしの口をきいているのを見ると、嬉しくもあり、そんなに急いで大きくなるな…とも思ってしまう。

超無口とはいえ、時松も同じだ。本が大好きで、いつも本を読んでいる。そのせいか、陽菜よりもちょっとおとなびているような印象を受ける。何を話しているかは知らないが、定春と仲良さげに本を片手に遊んでいる光景も目にするが、基本はひとりで本を読むのがいちばん好きなようだ。本の中で自分のお気に入りのもものを見つけると、それを教えに銀時のところにそつとやって来る。そのいかにも楽しい様子を見る時が、一番ほつとする時間だ。

ちよつと前までは、お気に入りのは魚や動物が多かったが、今は電車が一番のお気に入りらしい。以前、電車図鑑を買ってやつたら、涙を流さんばかりに大喜び。今朝も出掛ける直前まで、その図鑑を持って来る、来ないで母親と押し問答をしていた。図鑑のかわりに電車のおもちゃを一個だけ持って行くことで納得したらしい…

その時、車内アナウンスが流れた。アナウンスを聞き、銀時がふたりに声をかける。

「お、そろそろ目的地に到着ですよ、おふたりさん？降りる準備をしてください？」

陽菜と時松のふたりは慌てて銀時の膝からすべりおり、小さなリュックを背負ったり、帽子をかぶったりこまごまとした身支度を始めた。帽子が上手にかぶれなくても、リュックをなかなかうまく背負えなくても、銀時は手を貸さない。黙って待っている。靴もきちんと履き直すまで待つ。やきもきはするが、これが銀時の中のルールなのだ。さっきも、つい手を出してしまいそうになったが、そこは我慢、我慢の銀時なのだ。

俺が教えてやれることなんて、いくつもあるわけがねエシ。

だとしたら、こいつらがちゃんとひとりの大人として早く自立できるように手助けするのが一番でしょうが…。

だからこそその見守りだ。ふたりがなんとか身支度を終えたのは、電車がホームにすべりこんで停車する寸前だった。

「はいはいはい、降りますよオ」

「ちちうえ、どっちイ？」

ふたりの手をひいてホームを歩く。海岸沿いの小さな駅は無人駅。ホームの終端がそのまま改札口になっている。誰もいない改札口に三人分の切符を置き、一步外に出る。

…ざざん

かすかに海の音が聞こえ、風にのって一瞬、潮のにおいが吹きぬけた。時松がくん、と鼻を動かし、いぶかしげな顔をする。

「時松ウ、今の、なんのにおいかかったア？」

時松がふるふるとかぶりをふる。

「今のが、海のおいです。時松は海、はじめてだから知らないにおいだったかもねエ」

うんうん、と大きく時松がうなずいた。

一方の陽菜は、ぐいぐいと銀時の手を引っ張りながら

「ちちうえ、見て見てー！なのはなが、なのはなが！」

と、満開の菜の花畑を目にして、少々興奮気味だ。

「でんしゃから見るとよりおおきいのよー！ちちうえ、早くー！」

「はいはい、陽菜よオ、そんなに興奮しなさんなつてエの！」

駅舎から出ると、菜の花の鮮やかな黄色と、きれいに晴れ渡った空の青が視界に飛び込んできた。

「まーぶーしー…ちちうえ、すごい色よー？」

陽菜も時松も眩しそうに目を細め、鮮やかな色に目をしばたいている。

「さあさあ、おふたりさん？お寺に向かうとしますかねエ？」

銀時はふたりの手を握り、いつもの寺への道へと向かった。

「ちちうえ？」

「ん？」

「さつきから、ひなたたちの周りを、ちようちよがずっと飛んでいるのよ？」

「…おお、そーいやすうだねエ？きつと陽菜と時松にこんちわアつて言つてんじゃねエの？」

気がつけば時松の帽子や、リュックサックの上にひらひらと数羽の紋白蝶がとまっている。

「つて、時松？なんか、おめエ、ちようちよさん方にえらくもててんじゃねエの？」

時松の顔をのぞきこんで冷やかすと、ちよつと照れくさそうにはにかんで時松が笑う。

「…ちようちよ、すごく嬉しいって」

久々に聞く時松のおしゃべりだ。ほんとはおおげさに驚いてほめてやりたいところだが、かえって時松を驚かせてもいけないと思い、銀時はごくごく普通に答える。

「そうかい？ 他になんかお話してなかったア？」

「おてらに、ちちうえを待つてる人がいるって」

銀時はその答えを聞き、ちょっと顔色を変えた。寺に眠っている人のことは母親しか知らず、今日はふたりのこどもには何も話さずに来たのだ。だからそのことを時松が知っていることは、まずありえないのだが…。なぜ、時松はこんなことを？

「ときまつウ、ちちうえを待つてる人つてだアレ？」

陽菜が時松に問い質している。

紋白蝶をとまらせたままの姿で、時松は陽菜の質問に無言で首をふり

「わかんない…でも待つてるって」

「ふうーん、だれだろ？ ちちうえ、わかるの？」

陽菜の問いにふと我に返り、銀時ははつとする。

「おう、父上はなんでもお見通しだからねエ？ ついでに言うと、陽菜がア、ゆうべのおかずでピーマンをこっそり残していたことも、時松がお風呂に電車のおもちやを入れて壊しちゃったことも、みんなお見通しだからねエ？」

そう言つて、ふたりのこどもを見下ろしながらニヤリと笑う。

陽菜と銀時は、口をぽかーんと開け畏敬の眼差しで銀時をただただ見つめるだけ。

それにしても、寺で待つてるツツたらあいつしかいねエのに…どうして時松のやつがそのことを知ってるんだか…ちようちよが言つてたなんて、まさかほんとに？

「…ここの風景は変わンねエなア」

銀時が思わずあたりを見回しながら、そんな独り言をもらすと、耳ざとく陽菜が銀時に向かって聞いてきた。

「ちちうえは、ここよく知ってるの？」

「ん？ああ、そうねエ。おまえたちが生まれるずっと前から、父上はここに来ていたからねエ」

「ははうえと、いつしよに？」

「いんや、ははうえといつしよに来る前よりもずっと前から、父上ひとりで来ていたっけなア」

「ちちうえ、ひとりでさみしくなかった？」

「ん？」

「ひなが、ひとりだったらさみしいのよ？ちちうえ、ひとりでさみしくなかった？」

陽菜の質問にふと言葉が詰まる銀時。：そうかもしれない、俺はズーっとひとりでこの寺に来ていたが、ほんとに誰かといつしよに来たかったのかもしれない…。

「さみしかったかもねエ。でも、その頃の父上はさみしい、ってことも気づかなかったのかもしれないよオ？」

「どして？」

「ズーっとひとりぼっちだったから。誰かといつしよにいるのが怖かったからしれないねエ」

「いまもそうなの？」

「まさかア！今は陽菜と時松と、母上といつしよに暮らしていて、最ッ高に幸せだもん。」

「みんないっしょで、ほんとに幸せだよオ？」

「よかったのねエ。でも、こんどちちうえがひとりぼっちになっても、だいじょうぶなのよ？」

「ひなと、ときまつがついてるから！ね？ときまつ？」

思わず陽菜の言葉に危うく、感動しそうになる銀時。

そして、陽菜の言葉に時松がこくりと頷きながら、こう言う。

「ははうえがちちうえのことをきらいになっても、ひなとぼくは、ちちうえについているから」

「…おまえたち、ありがとなア…って！」

時松ツ！今、おまえさア、さりげなく嫌アなこと言ったでしょツ！

父上は聞き逃しませんでしたツ！何それツ？母上が父上のこと嫌いになるって？

何それ、どういう前提のお話イ？」

「こないだ、とうしろちゃんとしようぼうしやをみにいったとき、そうちゃんと、とうしろちゃんがそんなお話してた」

「…あいつらア！帰ったら一回シメとくかア？

…いいですかア、ふたりともオ！父上と母上はすごいラブラブだからツ！

おまえたちは知らないだろうけど、ものすごい大恋愛して結婚したんですからツ！

そりゃア、もうふたりの絆は赤い糸どころか、注連縄くらいあるンだからツ！

絶対喧嘩別れなんかしませんからツ！」

思わずむきになってしまふ銀時。ふたりのこどもは、ぽかーんと銀時を見上げている。

「…まアとにかくだ、父上と母上はおまえたちふたりのことや、みんなのことが大好きですよっていうお話です」

「…ふ、ふーん」

陽菜が目をまんまるにしながら、相槌をうつ。

「…ふうん」

時松も同じように目をまんまるにして、頷く。

まったく、あいつら、余計なことばっかし吹き込みやがってエ…。

「ははうえもいつしよだったら、よかったのに…」

今日は、時松がずいぶんおしゃべりだ。母親の話が出たら、恋しくなったのか急にさみしげな顔をしてこんなことを呟いた。

「…うん。今度はかならずみんな一緒に来ようなア？」

こく、と時松がうなずく。

「ときまつツ、あとでははうえの作ってくれたおべんと、食べよ？
ね？」

陽菜が時松を励ますかのように、声をかけている。

「おう、そうだそうだ！」

母上特製の甘くておいしいー厚焼き玉子や、唐揚げ、コロッケ…。
陽菜の大好きなつくねも入っていたつけなア…。それにおむすびが
たくさん詰まったお弁当だよウ？

おッ、お弁当の話をしたら、急に腹が減ってきたなア…

父上だけ先に行ってエ、お弁当食べちゃおッかなア…」

そう言って、お弁当が入った手提げ袋を持った銀時が走り出しそ
うなふりをする、と、途端にふたりは元気になって我先にと走り出し
た。ふたりに追いつきそうなふりをしながら、菜の花の咲く道をと
つとこ走っていく。行く先には、ひらりひらりと紋白蝶が飛んでい
る。

おう、また今年も来たゼイ？今年もふたつこんまいのオおまけつ
きだよオ？

心の中で、あいつに呼びかけながら、銀時は菜の花の中を走って
いった。

目指す寺に着くと、こどもたちはあはあ言いながら最後に到着
した銀時に向かって口々に言う。

「ちちうえの負けー」

「ぼくたちの勝ちー」

ふたりがあんまり嬉しそうに言うものだから、銀時は思わず笑顔になりそうになるのを我慢して、残念そうな顔をする。そして悔しがってみせた。

「残念！負けましたア！」

寺の境内入り口のすすぎで手と口を洗い、本堂で桶とひしゃく、たわしを借りる。そして目指す墓碑の前に三人で並ぶ。

「ちちうえ、ここー？」

「そだよオ、さ、まずまんまんちゃんあーんってしな？」

銀時の指示に従い、陽菜と時松は神妙な顔をし、小さな手を合わせて目をつぶっている。

おう、一年ぶりだなア。そっちは変わりはねエかい？

今年は、初めてうちのこんまいのを連れてきてみたわア。女の子が陽菜、男の子が時松ってんだ。双子だよオ？ふたりの名前は松陽先生の名前から一文字づついただいたんだよオ…

手を合わせながら、心の中でそんなことを話しかけていると、こどもたちがおなか減った！と騒ぎ始める。

「まったく、おまえたちってやつはア！もう少してとこの辛抱ができねエンだから！」

「だってだって、おなかと背中がぺたーんってなっちゃうのよー」

「ははうえのおむすび…」

「はいはいはい、わアりましたッ！じゃあ、ほら陽菜はたわしとか持って！時松はひしゃくを持って！お寺の裏手にいけば丘になつてッからア、そこで昼飯にしかア？」

「はい！」

寺の境内から続く小道に沿って行くと、見晴らしのいい小さな丘に出た。眼下いっぱい広がる一面の菜の花畑、そして黄色の花の

中にぼつぽつと点在している住宅の屋根。花畑の向こうには、小さく細く青い海がちりと見えた。海側から気持ちのいい風がすいーっと吹いてくる。丘の上のシロツメクサや、クローバーをさやさやと揺らして風が丘を通りすぎていく。急に視界が開け、こどもたちは嬉しそうに駆け出した。

「お、おいおいッ！ころばねエようにしなッ？」

銀時の注意もどこへやら、陽菜も時松も嬉しくてたまらない感じで、草の上ではしゃいでいる。

「ちちうえー！はやくお弁当を食べようよー」

「…おむすび」

ふたりにせつつかれて、銀時は母親心づくしの弁当を広げる。包みが開けられるたび、こどもたちは歓声をあげる。

「ほらもう！はい、手エふいて！時松もはい！ほら！」

ふたりの顔を拭き、手を拭いてやり、やっと食事の算段が整う。

「はい、ふたりとも、ごはんの前はなんだっけエ？」

「ちちうえ、ははうえ、いただきまーす」

早速、大好物のつくねに手をのばす陽菜。にこにこしながらおむすびを手にし、ほおばる時松。

銀時も玉子焼きを取り、ほおばる。

「…うまし。おいしいなア、な？」

「うん！」

「…おいし」

やさしい海風に吹かれ、おいしいお弁当をパクつく三人。おなかいっぱいになって食事を終える。おながかくちくなつた後は、こんどは体がむずむずしてくるらしく、陽菜にいたっては銀時に手を拭いてもらっている最中も、気もそぞろで辺りを見渡している。

「ちちうえ、お片づけしたら、ちょっと遊んできていい？」

「あんまり遠くまでいかない、って約束できる？」

「ん！」

「時松、陽菜といっしょに行ってくれろ？」

「うん」

顔についた食べ物の汚れをきれいに拭いてやると、待ちきれない様子で陽菜が駆け出す。時松も負けじといっしょに走り出す。

「あんまりはしゃいで、すっころんだりすんじゃないよ？」

「はい」

ちよつと離れたところで、陽菜と時松がなにやらくすくす笑いながら遊んでいるらしい。波がはねる…ざざん、というかすかな音、草の間を忙しく飛び回る虫たちのかすかな羽音、海風がわたつていく時、髪をゆらしていく音…。そんないろいろな音に耳を傾けながら、銀時は草むらの上に仰向けに寝っ転がった。横たわったまま、こどもたちに声をかける。

「陽菜ア、時松ウ！悪さアしてねエかア？」

「…してなアーい！」

…あの含み笑いをしている声は、絶対なにか悪さしていやがんなア。やれやれ、今度はどんないたずらをしかけられるンやら…

そんなことを考えながら、空を眺めているとふと睡魔が銀時のまぶたを襲った。だめだ、こどもたちがいるんだから、眠ッちまっちゃだめだツつの…と睡魔に抗ってはみるものの、すつとまぶたをとじられて、心地よい眠りに銀時は吸い込まれていった…

「…銀時ツ！銀時ツ！」

「…ンなアにイ？もオ…あと5分だけツ、お願いツ！」

「だめだったら！銀時、起きてツ！」

「もう何度もしつけエな！起きるツて！起きりゃアいんでしょオツ？」

そう言うなり、自分の声ではち、と目を覚ます銀時。うたたねをしていたのは、ほんの10分ほどのことだと思われるが、目を覚ますなり、銀時は慌ててふたりのこどもの名を呼んだ。

「陽菜ア！時松ウ！」

「…なアーにイ？ちちうえエ？」

ああ、よかつた無事だった…とほつと胸を撫で下ろす。あぶねエ、うつかり眠ッちまったア…と頭をかきながら、半身を起こしながらのびをする。

…そういえば、なんかア懐かしい気持ちで目が覚めたんだけどなア。

なにか思い出せそうで、思い出せない。そんな気持ちを抱えつつ、銀時はむくりと起き上がってこどもたちの姿を探した。ふたりは思ったよりもすぐ近くで、シロツメクサの花輪や花束を作るのに夢中になっていた。

「おツ？ハイカラなもん、作ってンなア？」

「あのねエ、ははうえにもって帰るのよ？」

「おはな、きれいだから」

「母上、すっごい喜ぶぞオ？嬉しくツて泣き出しちゃうかもねエ」

銀時の言葉に、ふたりともへへ…とはにかみながら笑う。

「それにしても、よくこんな編み方知ってたなア？誰に教えてもらったのオ？」

花輪も花束も、すっかりしたつくりになっていて、三歳のこどもの思いつきで作ることができるような代物ではなかった。

「ちちうえの知りあいのお姉ちゃまに、教えてもらったのよ？」

「むかし、せつかくつくったはなわを、ちちうえにとられちゃったことがあるって言ってた」

…え？誰エ？誰のこと？

銀時は思い当たる節がなく、いぶかしげにふたりのこどもに目顔で尋ねる。

「こどものころ、ちちうえといっしょの学校に行っていたんだって！」

「よく、ちちうえにいじめられたって。でも倍くらい、やりかえしたって」

松陽先生の塾での仲間は、ほとんどがあの戦で亡くなり、生き残っていて、なおかつ行方がわかつているのは片手に足りるほどの人数だ。しかもお姉ちゃま、というからには女。女の知り合いなんて、いやしねエ……

……いや、いる。ってか、いた。

「そのお姉ちゃま、どこ行っただ？」

「ちちうえを起こしたあと、ばいばい、ってどっか行っちゃったよ……？」

陽菜の返事を聞き、銀時は顔がひきつりそうになるのを必死でこらえた。

「どっか行っちゃった……ってエのは、お家に帰ったとか、そういうことなのかな？」

「ううん、ひなときまつにばいばい、ってしたあと、ふわって消えた」

「ん、ふわって消えた」

「おいおいおいおい、おまえたちイ？それッてエ、なんか変じゃない？とか思わなかったのオ？」

すっかりうるたえながら、銀時はふたりのこどもに聞く。

「普通、人ってエのはふわっと消えていなくなる人はいないでしょうがッ！」

おまえたちってば“あれ？なんか変かも？”とか“ちよつとおかしいかも？”とかって思わなかったんですかア？ねエねエ？”

銀時にそう言われても、ふたりのこどもたちは一向に動じる様子も見せずに、ちよつと首をかしげてこう言った。

「あのねえ、そのお姉ちゃま、はじめはちよつだったのよ、ね？ときまつ」

「ん、ちよつちよだった」

「で、ちよつちよだったんだけど、あたしたちとどうしてもお話がしたくて、かみさまにお願いしてちよつとだけでものすがたになったのよ、って笑ってたのよ」

「ん、ちちうえはきつとびっくりするから、おねんねしてもらったって言うってた」

銀時は混乱する頭の中をなんとか整理をつけるかのように、わしやわしやと頭の毛をかきむしる。

「えエ？じゃアなんですかア？」

そのお姉ちゃまつつウのは、あのお寺にいるオレのおさななじみのあいつってわけエ？」

「そうそう！そうなのよ！」

「おさななじみって言うってた、言うってた」

ふたりのこどもたちは、嬉しそうにころころと笑う。

「ちちうえのこと、とってもだい好きだったんだって！」

「死んじゃうときに、さいごのさいごで会えてうれしかったって！」

銀時とあいつしか知らないことを、こどもたちがあどけない笑顔で銀時に話す。

「ちちうえがまいとし会いに来てくれるの、ありがとって！」

「まいとしちよつちよになつて待ってるの、知ってた？って！」

こどもたちがシロツメクサを手に、きやつきやつと話してくるのを聞いていたら、しだいに銀時はびくついている自分がばかばかし

く思えてきた。幽霊ツたつて、もとはあいつだよオ？なんも怖いこたアねエ…はずだよね？などとも思えてきて、さっきのうろたえていた自分がアホらしくさえ思えてくるから不思議だ。そして、苦笑いをしながら、もういちど頭をわしゃわしゃとかきむしる。

…まいったなア、おい！まじで、ほんとに会いにきてくれちゃったわけエ？

目を閉じて、海風を胸いっぱい吸い込みながら、吹き抜ける風に向かつて心の中で話しかける。

おめエ、義理がてエにもほどがあンじゃないのオ？

まあ、ちよつと驚いちゃいましたけどオ？正直、ビビりましたけどオ？

…てエしたもんだ、おめエつてやつア。

そう、心の中で面影として残っているあいつの茶目っ気たっぷり笑顔に向かつて話しかける。

「ちちうえ？ちちうえ？立ったまま、おねんねしてるの？」

陽菜が心配そうに着物のすそをつかんできた。足許を見やると、陽菜の後ろで時松も心配そうに銀時を見上げている。

「お、悪イ悪イ！今なア、父上はおまえたちと遊んでくれたお姉ちやまとお話してたのよオ」

「お姉ちやま、なんて？」

「んー、内緒。おーしーえーなーいーツとー！」

「ずるーい！ちちうえ、ずるいですウー！」

ぷうつとふくれつつらをした陽菜をひよいと抱き上げると、高い高いをしてやる銀時。そして陽菜をばん、と背中におんぶし、もじもじしている時松を抱き上げる。

「つしょつと。おう、おまえたち、けつこう重くなつたなア……」
「だつてねエ、もうさんさいなのよ」

陽菜の言葉に合わせるように、時松も小さな手で指を三本たてて銀時に三歳をアピールしてくる。その一生懸命な様がおかしくて、そして愛しくてたまらない。

……見てくんな？陽菜と時松。オレの子だよ？ふたごだつてさ。
陽菜の菜は、菜の花からとったんだよ？おめエのように、やさしくて口うるさくて、そしてしっかりしているいい女になりますよ
うにうに思つてさア……

ふたりのこどもを背中と胸に抱いたまま、銀時は荷物を持って歩き出す。

「ちちうえ、どこ行くの？」
「んー？ひさしぶりにお寺のぼつつあまに挨拶していこうかなッてなア」

菜の花畑の間にある人ひとり、やつと通れるくらいの道をたどつて寺まで戻る。そして庫裏で声をかけた。

「……おうおう、誰かと思うたら銀時さんではないか。おう？おさなごがこいつしょか？」

ささ、さあどうぞ、早う中にあがりなされ、さあさあ！」

住職に誘われて、庫裏内にあがる銀時たち。

銀時と住職が話している間、陽菜と時松は本堂で遊ぶのを許してもらった。かすかにふたりの足音や声が聞こえてきている。

「……もう何年になりますかな？」

「さあ、数えたこたアないので見当もつきやせん」

「そついうお方ですものな、銀時さんという方は」

「そういう方なんです、オレってやつは」

そう銀時が答えると、住職は嬉しそうに、ほほほほ、と笑い出した。いっしょに銀時も笑い出す。

「おさなごたちも、あつと言う間にあないに大きゅうなつて…。

こないだ生まれたかと思っておりましたのに…。

毎年毎年の成長ぶりが、ほんに楽しみでなりませんよ?」

ありがとうございます、と頭を下げながら銀時がはにかむ。

「お父上の気性をそっくり受け継いだような陽菜ちゃん、そして大きな器を感じさせる時松ちゃん…。おふたりとも将来が楽しみなことです」

住職がお茶で喉をうるおしながら、言葉を続ける。

「きつとお母上様のお導きが、大層よろしいのでしょうねえ…」

銀時の顔をチラリと見ながら、住職が含み笑いをする。

「もう勘弁してくださいよオ、オレだって父親としてやってるつもりなんですけどオ?」

住職の言葉にわざとふてくされたような顔をする銀時。

「すまぬすまぬ…。あの娘さんのお骨と位牌を持ってきた頃の銀時さんのことを思うと、ほんにずいぶん優しくそして、穏やかになられたと思うてな?」

「…」

「ご住職、そのことなんですけどオ…」

「来ましたか?」

「はい?」

「そなたのもとに、あの娘さん来ましたか?」

「…え? いや、来たってか、あの、オレは見えてないってかア」

鳩が豆鉄砲をくらったかのように吃驚した顔で、しどろもどろ返答する銀時に向かって住職はにっこり笑いかけた。

「数日前に、あの娘さんが夢枕に立ちましてな。もうすぐ銀時さんが、ふたりのこどもを連れて来てくれる。なんだか嬉しいから、今

年はがんばってみるとかなんとか申したいような…？」

ああ、だからなのねエ。

合点のいった顔をしている銀時を見ながら、住職はほっほっほと笑う。

「して、どのような話をなさいました？」

「いやあ、実はですね…」

自分はいつに眠らされて、話をしたのはふたりのこどもただけだ、と。こどもたちの話からすると、あいつは嬉しそうにいろいろふたりに聞いていつたらしい、と。

そして、帰り際に昔のように自分を起こして帰っていきました…と銀時は話した。

「そうでしたか…。なかなか心憎いことをされますこと」

住職の言葉に、銀時が頷く。

そこへ陽菜と時松が木魚と木杵を手に手に持って、駆け込んだ。た。

「ちちうえー、これよい音がでるのよー」

「おっきい音、たくさーん！」

銀時は慌てて、ふたりの襟首をつかんで叱りつける。

「仏様にお祈りするときの道具で、遊ぶんじゃねッつの！ 仏様が吃驚しちゃうでしょうがッ！」

「まあまあまあ、銀時さん、そうそう叱りつけなくても…。おふたりさん、奥でおやつをいかが？」

住職に笑顔で誘われ、ふたりのこどもは元気よく返事をする。住職の両手にぶらさふがり、仲良くおやつを食べに行った。

庫裏の客間にひとり残された銀時。座卓に頬杖をつきながら、ものいわぬあいつに向かって話しかける。

見ての通り、元気すぎて困っちゃうくれエのこどもたちだ。

おかげさまで、なんとかすくすく育ってる。

結婚して、夫婦になって。今度は父親になんかなったよオ？
正直、自信がないところもあったけどオ、なんとかやってるわア。

…ふふ。あのこたち、いいこだもんね？

ああ、親の欲目かもしれねエが、ふたりともいいやつなんだア…

陽菜ちゃんは銀時そっくりで…、時松くんはお母さん似なのかな
ア？

陽菜ちゃん、こどもの頃の銀時そっくりで、なんか懐かしかった
なあ…

…そつかア？そんなに似てるウ？

うん、もうチビ銀ってかんじ、ふふふ。

あ、それヅラにも言われた。

やめろ、って言ったんだけどオ、会いにくるたび“よッ、チビ銀
！”って言うんだよ、あいつ。

だから今じゃ、家ではヅラのことチビ銀のおじちゃんって呼んで
るもんねエ。

…銀時、しあわせなんだね？

ああ。しあわせだ。

…よかった。これからも精進しなよ？

じゃあね？

遠くで海の音が聞こえる。

はじめてこの寺を訪れた日も、そうだった。

目の前で灯りが消えていくように命を落としたあいつの死に様に、なにもできなかった自分が齒がゆくて、悔しくて、どうしようもなく、この寺にあいつのお骨と位牌を持ってきた時は、ずいぶん居丈高な態度で住職に墓を作ってくれるよう、頼んだものだ。

そんな銀時のぶつけようのない怒りをやんわり受け流し、そして見守ってくれた住職にはおそらく一生頭が上がらないだろう。

毎年、あいつの命日にこの寺に墓参に来て、住職とひととき、よもやま話をして帰る。その習慣は、自分が死ぬまで続けようと思っている。

ふん、その前にあのばつつあまが、くたばっちまうかもしれないエけどな…

何も変わらないものもあれば、確かに変わるものもある。

変わるものは、変わり続けながら、きっと最後はもとのところに戻っていくのかもしれない。

だから、いつかきつと、あいつにもそして松陽先生にも、そして先に逝ってしまった仲間たちにも会える。

海の音が、こころなしか大きくなったような気がする。そろそろ満ち潮の時間だろうか。

そろそろ家路につくか…そう思い、やおら立ち上がる銀時である。「いよつこらしよつとオ…。おうーい、おまえたちイ、そろそろ帰エりますよオ！」

カブキ町に着いた頃は、とつぷり日も暮れて、夕焼け空と群青色の宵闇が混ざり合った空の色になっていた。直前まで眠っていた陽菜と時松は、少々ぐずりながら目をこすりつつ、銀時に手をひかれ、改札口に向かう。

「ほら、母上が迎えにきてるよオ？」

銀時がふたりに向かって声をかける。

改札口の向こうには、にこにこ笑いながら彼女が大きく手を振っている。

「ははうえだ！」

「ははうえ！」

それまで、やれ眠すぎて歩けない、だの、足が重くて一步も動けない、だのこねていたのが嘘のような喜びっぷりのふたりである。

改札口を抜けると、銀時の手を離して母親に駆け寄るふたり。口々に我先にと今日の出来事を報告しようとしている。そんなふたりをかきわけるように、銀時が彼女にそっと寄り添った。

「……どうだったア？」

銀時の問いかけに、にっこり笑って嬉しそうに頷く彼女。

「そつかア！おおーッし！でかした、でかしたア！」

そう言いざま、彼女を抱きしめ、そのまま抱き上げる。

「ああつ、ちちうえ、ずるーい！ははうえとだっこしてー！」

「ははうえ、ははうえ！」

陽菜と時松がぶうとふくれているのをよそめに、彼女を抱きしめ、そのおでこに優しくそつとキスをする銀時。

「あーっ、ちちうえ、ひなもっ、ひなもっ！」

銀時のうれしげな様子に時松が、何かを感じたようだ。

「ははうえ、なにかあったの？」

「おう、おまえたち！よーっく聞きなさいイ？」

もう少ししたら、おまえたちの弟か、妹がやってくつぞオ？どうだア？」

「おとうと？ひなの？」

「いもうと？おとうと？」

「そうです、まだどっちはわっかんないけどオ、子分ができつぞオ？」

「いつ？いつくんのオ？ひなのおとうとオ！」

「ぼくは、いもうとがいい」

銀時に寄り添いながら、彼女がふたりに話す。

「クリスマスには、会えるかもね？」

「うわーい、はやくこーい」

「いもうと、いもうと！」

嬉しそうに母親にまわりつく陽菜と時松。そんな三人の姿を見ながら、銀時はもういちど心の中で呟いた。

ありがとな…。

そんな銀時のつぶやきに応えるかのように、宵の明星が力チリときらめく。

「銀時さま？」

「…おう、さ、帰エりますかア！」

右手に陽菜の手、左手は彼女。そして彼女の左手は時松とつながっている。

変わらないもの、そして確かに変わっていくもの。ここには、いつもと同じ風景が待っている…。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8487m/>

菜の花満開の道、共に～銀時＋チビ銀日和～

2010年10月8日13時56分発行